Japan Epilepsy Society

E-13 双極子追跡法による脳器質性病変を伴うてんかん発作の焦点推定

群馬大学精神神経科　同脳神経外科*

○柴田　信義、服部　卓、貴船　亮、久保田　文雄、町山　幸輝、高橋　章夫*

従来、脳器質性病変によりてんかん発作が生じたと考えられる症例では焦点は脳器質性病変にあるとされている。今回、我々は脳器質性病変を伴うてんかん発作を持つ3症例について双極子追跡法(DTM)を用いててんかん焦点を推定し、脳器質性病変の位置と比較検討を行ったので報告する。

対象と方法　症例1：44歳、男性。右側頭葉領域をほぼ占有するクモ膜嚢胞を認めた。17歳初発で体性感覚発作、複雑部分発作が月に1,2回の頻度で出現し、脳波所見では右C,aT,mT,pTにfocal spikeを認めた。症例2：37歳、女性。右側頭葉底部の海馬領域に腫瘍を認めた。27歳初発で複雑部分発作、時に強直間代発作が月に1回の頻度で出現し、脳波所見では右Fp,F,C,aTにfocal spikeを認めた。症例3：24歳、男性。右側頭葉底部の扁桃体から鈎にかけた領域に腫瘍を認めた。18歳初発で嗅覚発作、複雑部分発作が日に2，3回の頻度で出現し、脳波所見では右aT,Fpにfocal spikeを認めた。これら3症例に対し、中央電子（株）製双極子追跡装置（CDT1000）を用いて棘波のピーク付近を3層モデルを用いてone dipole分析およびtwo dipole分析を行った。

結果　症例1では嚢胞の外側皮質上で嚢胞に接した部位に焦点が推定された。症例2では扁桃体後方の部位で腫瘍の直下に焦点が推定された。症例3では右海馬で腫瘍の後方に接した部位に焦点が推定された。しかし、本例はそれだけでなく右上側頭回にも独立した焦点が推定された。

考察　症例3では脳器質性病変の近傍だけでなく、病変と離れた部分に独立した焦点が推定されたが、3症例には共通して病変の近傍にてんかん焦点が推定された。このことにより、DTMによる焦点同定が有効であることが示唆された。

E-14 サイトメガロウイルス感染によるWest症候群の1例

富山医科薬科大学小児科

○松沢純子，小西　徹，増子香織，本郷和久，山谷美和，八木信一，宮脇利男

［目的］　West症候群の病因の一つとして、中枢神経系のウイルス感染が考えられているが、なかでもサイトメガロウイルス（以下CMV）が注目されている。今回、生後5ヶ月、肝炎罹患時にWest症候群を発症し、生後8ヶ月時、ウイルス学的にCMV感染症と診断し得た1例を経験したので、その臨床経過について報告する。

［症例］　現在1歳8ヶ月、男児。在胎40週、2780g、正常分娩にて出生。あやし笑い2ヶ月、頸定3ヶ月とほぼ正常な発達であった。生後5ヶ月時、発熱した際に肝機能障害を認め、ほぼ同時期よりtonic spasmsが出現した。発作は1シリーズ10〜20回、1日5〜10シリーズで、6ヶ月頃より自然経過で1日5シリーズ程度に減少したが、次第に周囲への関心が低下し笑わなくなった。生後8ヶ月時に当科受診し、臨床発作および脳波所見よりWest症候群の診断で入院した。入院時、髄液検査でCMV-IgM陽性であり、PCR法にてCMV-DNAが検出されCMV感染症に起因する本症と考えた。活性型Vit B6大量療法は無効で、VPA投与により発作回数は減少、さらにCZPの併用にて一時的に消失した。脳波上もhypsarrythmiaは消失し、わずかに焦点性棘波を認めるのみであった。しかし、1歳過ぎより単発性tonic spasmsが再出現し、脳波でもperiodic hypsarrythmiaおよび多焦点性棘波を認めるようになった。血中のCMV-IgMは陰性であったが、PCR法にてCMV-DNAが検出されたことより、CMVの持続感染が示唆された。このため、免疫グロブリン療法（200mg/kg/day,4日間）を施行したが効果は得られず、VPA大量投与、CZPに加えてZNSを併用したが、発作回数の減少および脳波所見の変化は認められなかった。

［結語］自験例はPCR法により髄液中にCMV-DNAを検出し、中枢神経系CMV感染症の関与が示唆され、また、肝炎の発症と同時期に臨床発作症状の出現を認め、興味深い症例と考えられた。

E

NII-Electronic Library Service